

二十四孝

二十四孝

大舜

隊々耕^{としてすに}春象 紛々耘^{としてるを}草禽 嗣^で堯登^{にる}寶位^に 孝感動^す天心^を

大舜は至つて孝行なる人なり。父の名は瞽叟^{こそう}といへり、一段頑^{かたくな}にして、母は瞽^{かたま}しき人なり。弟はおほいに傲りて、いたづら人なり。然れども大舜はひたすら孝行をいたせり。ある時歷山といふ所に耕作しけるに、かれが孝行を感じて、大象が來つて田をたがへし、又鳥飛び來つて田の草をくさぎり、耕作の助けをなしたるなり。扱其時天下の御あるじをば堯王と名づけ奉る。姫君まします。姉をば娥黃と申し、妹は女英と申し侍り。堯王すなはち舜の孝行なることをきこしめし及ばれ、御娘を后にそなへ、終に天下をゆづり給へり。これひとへに孝行の深き心よりおこれり。

漢文帝

仁孝臨^ひ天下^に 魏々冠^{としてたり}二百王^に 漢廷事^ふ賢母^に 湯藥必親嘗^む

娥黃—原本嫁皇とあり

漢の文帝は漢の高祖の御子なり。いとけなき御名をば恒とぞ申し侍りき。母薄太后に孝行なり。よろづの食事を参らせらるゝ時は、まづみづからきこしめし試み給へり。兄弟も數多まし／＼けれども、此帝ほど仁義を行ひ孝行なるはなかりけり。此故に陳平、周勃などいひける臣下等、王になし参らせたり。それより漢の文帝と申し侍りき。然るに孝行の道は、上一人より下萬民まであるべき事なりと知るといへども、身に行ひ心に思ひ入る事はなり難きを、かたじけなくも四百餘州の天子の御身として、かくの如き御ことわざは、尊かりし御ことろざしとぞ。さる程に世もゆたかに民も安く住みけるとなり。

丁 蘭

刻^でレ木^を爲^す二父母^ミ 形容在日新^{なり} 寄^すレ言^を諸子姪^ミ 聞^て早^く孝^す二其親^ニ

丁蘭は河内の野王といふ所の人なり。十五のとし母におくれ、永くわかれを悲み、母の形を木像につくり、生ける人に事へぬる如くせり。丁蘭が妻ある夜の事なるに、火をもつて木像のおもてを焦したれば、瘡の如くにはれいで、膿血ながれて、二日を過しぬれば、妻の頭の髪が刀にて切りたる様になりて落ちたる程に、驚いて詫言をする間、丁蘭も奇特に思ひ、木像を大道へうつしおき、妻に三年わびことをさせたれば、一夜の内に雨風

の音して、木像はみづから内へ歸りたるなり。それよりしてかりそめの事をも、木像のけしきを伺ひたるとなり。かやうに不思議なる事のあるほどに、孝行をなしたるはたぐひすくなき事なるべし。

孟 宗 字恭武或子恭

泪滴朔風寒、蕭々竹數竿、須臾春筍出、天意報平安。

いたはり―苦痛する意

孟宗はいとけなくして父に後れ、ひとりの母を養へり。母年老いて常に病みいたはり食の味ひもたびごとに變りければ、よしなき物を望めり。冬の事たるに竹子たけのこをほしく思へり。すなはち孟宗竹林ちくりんに行き求むれども、雪ふかき折なればなどかたやすく得べき。ひとへに天道の御あはれみを頼み奉るとて、祈をかけて大きに悲み、竹によりそひける所に、俄に大地ひらけて、竹の子あまた生ひ出で侍りける。大に喜び、乃ちとりて歸りあつものにつくり、母に與へ侍りければ、母是を食してそのまゝ病もいえて齡をのべけり。是ひとへに孝行の深き心を感じて、天道より與へ給へり。

閔子騫

閔氏有賢郎、何曾怨晚娘、尊前留母在、三子免風霜。

閔子びんし寡けんいとけなくして母を失へり。父また妻をもとめて、二人ふたりの子をもてり。彼の妻、我子を深く愛して繼子まごこを惡み、寒き冬も蘆あしの穂を取りて、著る物に入れて著せ侍るあひだ、身も冷えて堪へかねたるを見て、父、後の妻を去らんとしければ、閔子寡がいふやうには、彼の妻を去りたらば、三たりの子寒かるべし、今われ一人寒きをこらへたらば、弟の二人はあたゝかなるべしとて、父を諫めたるゆゑに、これを感じて繼母けいぼも後のちには隔てなく慈いつくしみ、もとの母とおなじくなれり。只人のよしあしはみづからの心にありと、古人の言ひ侍りけるも、ことわりとこそ思ひ侍る。

曾 參

母指に纒ひ方む嚙は 兒心痛不ぜ禁げ 負て薪な歸來晚し 骨肉至情深し

曾參そうしんある時山中へ薪を取りに行き侍り、母留主にゐたりけるに、したしき友來れり。これをもてなしたく思へども、曾參そうしんはうちにあらず、もとより家まどしければ叶はず。曾

參が歸れかして、みづから指をかめり。曾參山に薪を拾ひるたるが、俄に胸さわぎしける程に、急ぎ家に歸りたれば、母ありすがたを具つぎに語り侍り、かくの如く指を嚙みたるが、遠きにこたへたるは、一段孝行にして、親子しんしのなさけ深きしるしなり。總そうじて曾參

ありすがたありのまゝの様子

の事は、人にかはりて心と心のうへの事をいへり。奥深きことわりあるべし。

王 祥

繼母人間有 王祥天下無 至^レ今河水上 一片臥^ニ氷摸^ニ

王祥はいとけなくして母を失へり。父また妻をもとむ、其名を朱氏といひ侍り。繼母の癖なれば、父子の中をあしく言ひなして、惡まし侍れども怨とせずして、繼母にもよく孝行をいたしけり。かやうの人なる程に、本の母冬の極めて寒き折ふし、生魚をほしく思ひける故に、肇府といふ所の河へもとめに行き侍り。されども冬の事なれば、氷とちていを見えず。すなはち衣をぬぎて裸になり、氷の上にふし、いを無きことを悲み居たれば、かの氷すこしとけて、いを二つをどり出でたり。乃ち取りて歸り、母にあたへ侍り。是ひとへに孝行のゆゑに、その所には毎年人の臥したる形、氷のうへにあるとなり。

老 萊 子

戲舞學^ニ嬌癡^ニ 春風動^ニ綵衣^ニ 雙親開^テ口笑 喜色滿^ニ庭闈^ニ

老萊子は二人の親に仕へたる人なり。されば老萊子七十にして、身にいつくしき衣を着て、幼きものの形になり、舞ひ戯れ、又親のために給仕をするとして、わざとけつまづきて

轉ころび、いとけなき者の泣くやうに泣きけり。この心は七十になりければ、年よりて形かたち麗うらしからざるほどに、さこそこの形を親の見給はゞ、わが身の年よりたるを悲しく思ひ給はんことを恐れ、また親の年よりたると思はれざるやうにとの爲に、かやうの舉動ふるまひをなしたるとなり。

姜 詩

舍側に甘泉出づ 一朝雙鯉魚 子能知く事り母を 婦更孝に於姑に

姜詩は母に孝行なる人なり。母つねに江の水を飲みたく思ひ、又なまいをの鯿なますをほしく思へり。すなはち姜詩妻をして、六七里の道を隔てたる江の水を汲ましめ、又いをの鯿をよくしたよめて與へ、夫婦共に常によく仕へり。或時姜詩が家の傍に、忽ちに江の如くして水湧きいで、朝ごとに水中に鯉あり、すなはち之をとりて母にあたへ侍り。かやうの不思議なる事のありけるは、ひとへに姜詩夫婦の孝行を感じて、天道より與へたまふなるべし。

唐 夫人

孝敬崔家婦 乳して姑に晨に盥す 此恩無し以報ず 願得は二子ん孫如かくのこごとく

したよめて一調
理して

唐夫人は姑しうごめ長孫夫人年たけ、よろづ食事齒に叶はざれば、つねに乳をふくめ、あるひは朝ごとに髪をけづり、其外よく仕へて、數年養ひ侍り。ある時長孫夫人わづらひつきて、このたびは死せんと思ひ、一門一家を集めていへる事は、わが唐夫人の數年の恩を報ぜずして、今死せん事残り多し、わが子孫唐夫人の孝義をまねてあるならば、必ず末も繁昌すべしといひ侍り。かやうに姑しうごめに孝行なるは古今稀なるとて、人みな之をほめたりと。さればやがて報いて、末繁昌する事はまりもなくありたるとなり。

楊香

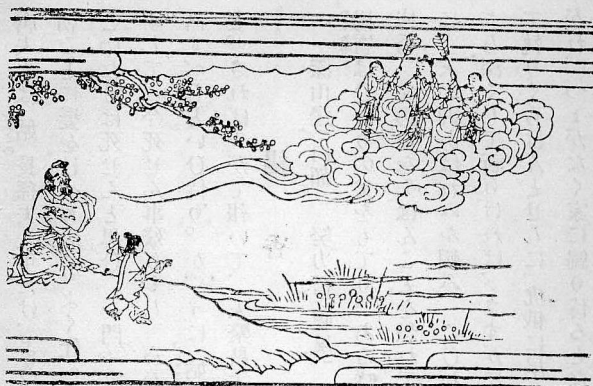
饑口―原本「饑甲」とあり、一本によりて改む

尾をすべて―尾をすぼめて

深山逢ふ三に日額に努力轉や腥風を父子俱に無し恙を脫る身饑口の中を―
楊香はひとりやうきやうの父をもてり。ある時父と共に山中へ行きしに、忽ちあらき虎にあへり。楊香、父の命を失はんことを恐れて、虎を追ひ去らしめんとし侍りけれども叶はざる程に、天の御あはれみを頼み、こひねがはくは我命を虎にあたへ、父を助けて給へと、心ざし深くして祈りければ、さすがに天も哀とおもひ給ひけるにや、今まで猛たふきかたちにて執りくらはんとせしに、虎俄に尾をすべて逃げ退きければ、父子ともに虎口の難をまぬがれ、つゝがなく家に歸り侍るとなり。これひとへに孝行の心ざし深きゆゑに、かやう

方香一々方品
とあり

かとの絹一こ
まやかに織りた
る絹布の一種、
緯



の奇特をあらはせるなるべし。

董 永

葬^に父^を貸^を二方香^を 天姫陌上^に迎^ふ
織^て絹^を償^を二債生^を 孝感盡知^る名^を

董永^{さうえい}はいとけなき時に母に離れ、家まどしくして常に人に雇はれ農作をし、賃をとりて日を送りたり。父さて足も起たざれば小車^{せうしゃ}を作り、父を乗せて、田のあぜにおいて養ひたり。ある時父におくれ、葬禮をととのへたく思ひ侍れども、もとよりまどしければ叶はず。されば料足十貫に身をうり、葬禮を営み侍り。諸かの錢主^{ぜにぬし}の許へ行きけるが、道にて一人の美女にあへり。かの董永が妻になるべしとて、ともに行きて、一月にかとの絹三百疋織りて、主^{ぬし}のかたへ返し

おひめー負債

たれば、主もこれを感じて、董永が身をゆるしたり。其後婦人董永にいふ様は、我は天上の織女おりひめなるが、汝が孝を感じて、我を降くだしておひめを償つぐなはせせりとて、天へぞあがりけり。

黄 香

冬月にやめてをにす温レ衾レ煖レ 夏天にやめてをにす扇レ枕涼レ 兒童知る子職を 千古一黄香

すとしめー涼しくし

黄香は安陵といふ所の人なり。九歳の時母におくれ、父に能く仕へて力を盡せり。されば夏の極めて暑き折には、枕や座を扇いですとしめて、また冬の至つて寒き時には、衾ふすまのつめたきことを悲んで、わが身をもつて暖めて與へたり。かやうに孝行なるとて、太守劉謹といひし人、札ふだをたてて彼が孝行をほめたる程に、それよりして人皆黄香こそ孝行第一の人なりと知りたるとなり。

王 裒

慈母怕る聞くをを雷を 冰魂宿す夜臺に 阿香時一震 到て墓に遶る千廻

王裒わうほうは營陰といふ所の人なり。父の王義、不慮の事によりて、帝王より法度はつぎに行はれ死にけるを恨みて、一期ごの間あひだその方はうへは向うて坐せざりしなり。父の墓所はかざらにゐて、ひざま

法度に行はれー
刊罰を蒙り

柏の木―支那にては墓所に柏を植ふる習俗なり

づき禮拜らいはいして、柏の木に取り付きて泣き悲む程に、涙かよりて木も枯れたるとなり。母は平生かみなりを恐れたる人なりければ、母むなしくなれる後にも、雷電のしける折には、急ぎ母の墓所へゆき、王裒これにありとて、墓をめぐり、死したる母に力を添へたり。かやうに死して後まで孝行をなしけるを以て、生ける時の孝行まで推しはかられて、有りがたき事どもなり。

郭巨

貧乏思ふ二供給か一 埋てレ兒願をふ二母存を一 黄金天所賜より 光彩照す寒門を一

光彩―原本光彩一とあり、一本によりて改む

夫婦云ひければ―夫婦談合したるに

郭巨は河内といふ所の人なり。家貧まさしうして母を養へり。妻一ひさりの子を生みて三歳になれり。郭巨が老母、彼の孫をいつくしみ、わが食事を分け與へけり。或時、郭巨妻に語る様は貧まさしければ母の食事さへ心に不足と思ひしに、其内を分けて孫に賜はれば乏しかるべし、是偏に我子の有りし故なり、所詮汝と夫婦たらば子二度有るべし、母は二度有るべからず、とかく此子を埋みて母を能く養ひたく思ふなりと夫婦云ひければ、妻もさすがに悲しく思へども、夫の命に違はず、彼の三歳の兒ちごを引きつれて、埋みに行き侍る。則ち郭巨涙を押へて、すこし掘りたれば、黄金わうごんの釜かまを掘り出だせり。其釜に不思議の文字すわれ

り。其文に曰く、天賜^ふ孝子郭巨^に不^レ得^レ奪^ふ民不^レ得^レ取^ると云々。此心は天道より郭巨に給ふ程に、餘人取るべからずとなり。則ち其釜をえて喜び、兒^こをも埋ます、ともに歸り、母にいよく孝行をつくせるとなり。

朱 壽 昌

七歲生^{にして}離母^を 參商五十年 一朝相^あ見面^を 喜氣動^す皇天^を

朱壽昌は七歳の時、父その母を去りけり。されば其母をよく知らざりければ、此事を歎き侍れども、つひに逢はざること五十年に及べり。ある時壽昌官人なりといへども、官祿をもすて、妻子をもすて、秦といふ所へ尋ねに行きけるとて、母に逢はせて給へとて、みづから身より血を出だして、經を書きて天道へ祈りをかけて尋ねたれば、心ざしの深きゆゑに、つひに尋ねあへるとなり。

剡 子

老親思^ふ鹿乳^を 身掛^に褐毛衣^を 若不^は高聲語^に 山中帶^に矢販^を

剡^{せん}子は親のために命を捨てんとしける程の孝行なる人なり。其故は父母老いて共に兩眼を煩ひし程に、眼の藥なるとて鹿の乳^ちを望めり。剡子もとより孝なる者なれば、親の望

みをかなへたく思ひ、すなはち鹿の皮を著て、數多むらがりたる鹿の中へまぎれ入り侍れば、獵人これを見て、實まことの鹿ぞと心得て、弓にて射んとしけり。其時剡さ子は實の鹿にはあらず、剡子といふ者なるが、親の望みを叶へたく思ひ、偽りて鹿の形となれりと、聲をあけて言ひければ、獵人驚いて其故を問へば、ありすがたを語る。されば孝行の志深き故に、矢をのがれて返りたり。そもく人として鹿の乳を求むればとていかでか得さすべき。されども思ひ入りたる孝行の思ひやられてあはれなり。

蔡順

黑槌奉うけ親闈に啼な飢に淚に滿つ衣に赤眉知て孝順を牛米贈て君歸にしむ

蔡順は汝南といふ所の人なり。王薺といへる人の時分の末に天下大に亂れ、又飢饉して食事に乏しければ、母のために桑の實を拾ひけるが、熟したると熟せざるとを分けたり。このとき世の亂みだれにより、人を殺し剥ぎ取りなどする者ども來つて、蔡順に問ふ様は、何なにとて二色ふたいろに拾ひ分けたるぞと言ひければ、蔡順ひとりの母をもてるが、此熟したるは母にあたへ、いまだ熟せざるは我がためなりと語りければ、心づよき不道ふだうの者なれども、かれが孝を感じて、米二斗と牛の足一つ與へて去りけり。その米と牛の腿ももとを母にあ

南齊—原本「南
亭」とあり、一
本によりて改む

たへ、又みづからも常に食すれども、一期の間盡きずして有りたるとなり。これ孝行の
しるしなり。

庾黔婁

到^て縣^に未^に旬^に日^に— 椿^に庭^に逢^ふ疾^き深^に— 願^は將^て身^を代^り死^に— 北^に望^を啓^く憂^を心^を—

庾黔婁は南齊の時の人なり。孱陵といふ所の官人になりて、すなはち孱陵縣へ至りける
が、いまだ十日にもならざるに、忽ちに胸さわぎしけるほどに、父の病み給ふかと思ひ、
官を捨てて歸りければ、案の如く大に病めり。黔婁、醫師によしあしを問ひければ、醫
師病者の糞を嘗めてみるに、甘く苦からばよかるべしと語りければ、黔婁やすき事なり
とて、嘗めて見ければ、味よからざりける程に、死せんことを悲み、北斗の星に祈をか
けて、身がはりにたゝん事を祈りたるとなり。

吳猛

夏^に夜^に無^し帷^を帳^を— 蚊^{して}多^く不^て敢^て揮^は— 恣^{して}渠^を膏^を血^を— 飽^く免^る使^を入^を親^を闈^を—

吳猛は八歳にして孝ある人なり。家まどしくしてよろづ心に足らざりけり。されば夏に
なりけれども帷帳もなし。吳猛みづから思へり、わが衣をぬぎて親に著せ、わが身はあ

らはにして蚊に喰はせたらば、蚊もわが身を喰ひ親を助けんと思ひ、すなはちいつも夜もすがら裸體になり、わが身を蚊にくはせて、親の方へ蚊の行かぬやうにして仕へたるとなり。いとけなき者のかやうの孝行は、不思議なりし事共なり。

張孝 張禮

偶値^ひ緑林^の兒^に代^{つて}烹^{るに}云^ふ三瘦肥^ち人皆有^り二兄弟^に張氏古今稀^{なり}

張孝張禮は兄弟なり。世間饑饉の時に、八十餘の母を養へり。木實を拾ひに行きたれば、一人の民疲れたる者來りて、張禮を殺して喰はんと云へり。張禮云ふ様は、われ老いたる母をもてり、けふはいまだ食事を參らせざりつる程に、すこしの暇を賜はれ、母に食物を參らせて、やがて參らん、もし此約束をたがへば、家に來りて一族までを殺し給へと云うて歸る。母に食事を進めて、約束の如くに彼の者の所へ至りけり。兄の張孝是を聞きて、又跡より行きて盜人にいふ様は、我は張禮より肥えたる程に、食するによかるべし。我を殺して張禮を助けよと云へり。又張禮は我はじめよりの約束なりとて、死を爭ひければ、彼の無道なる者も兄弟の孝義を感じて、共に死を免し、かやうの兄弟古今稀なりとて、米二石鹽一駄とあたへたる。是を取りて歸り、いよく孝道をなせるとな

り。

田眞 田廣 田慶

群芳總不如一本
群芳總不知
とあり、一本に
よりて改む

海底紫珊瑚 群芳總不如 春風花滿樹 兄弟復同居

此三人は兄弟なり。親におくれてのち、親の財寶を三つに分けて取れるが、庭前に紫荆樹とて、枝葉榮え花も咲き亂れたる木一本あり。これをも三つにわけて取るべしとて、終夜三人詮議しけるが、夜の既に明けければ、木を切らんとて、木のもとへ至りければ、昨日まで榮えたる木が俄に枯れたり。田眞之を見て、草木心ありて切りわかつたといへるを聞いて枯れたり、まことに人として、これを辨へざるべしやとて、分たずしておきたれば、又ふたよびもとの如く榮えたるとなり。

山谷

貴顯聞三天下 平生孝事親 汲泉涓澗器 婢妾豈無人

山谷は宋の代の詩人なり、今にいたりて詩人の祖師といはるゝ人なり。あまたつかひ人もあり、又妻も有りといへども、みづから母の大小便の器物をとり扱ひて、汚れたる時は手づからこれを洗ひて母にあたへ、朝夕よく仕へて怠る事なし。さらば一を以て萬を知

一を以て萬を知る
一花子非相篇

以_レ知萬、以微
知明_レ

るなれば、其外の孝行推し量られたるとて、此人の孝義天下にあらはれたるとなり。この山谷のことは餘_よの人にかはりて、名の高き人なり。

陸 績 字公紀

孝悌皆天性 人間六歳_の兒 袖中懷_に綠橘_を 遺_て母報_に含飴_を

陸績六歳の時、袁術といふ人の所へ行き侍り。袁術陸績がために菓子に橘を出だせり。陸績これを三つ取りて、袖に入れて歸るとて、袁術に禮をいたすとて、袂より落せり。袁術これを見て、陸績どのは幼き人に似合はぬことと言ひ侍りければ、あまりに見事なるほどに、家にかへり母にあたへんためなりと申し侍り。袁術これを聞きて、幼き心にてかやうの心づけ古今希なりとほめたとなり。さてこそ天下の人、かれが孝行なることを知りたりとなり。